

王子は、低く調子のよい声で続けました。「ずっと向こうの小さな通りにまずしい家がある。まどが一つ開いていて、テーブルの所に母親がいる。顔はやせこけ、つかれている。かの女の手はあれ、ぬいばりできずついて赤くなっている。かの女はおはりこをしているのだ。その母親はトケイソウの花をサテンのガウンにししゅうしようとしている。そのガウンは女王様の一番かわいいむすめのためのもので、次のぶとう会に着ることになっているのだ。その部屋のすみのベッドでは、おさないむすこが病気のために横になっている。熱があって、オレンジが食べたいと言っている。母親があたえられるものは川の水だけなので、その子は泣いている。ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん。わたくしのけんからルビーを取り出して、あの母親にあげてくれないか。両足がこの台に固定されているから、わたくしは行けないのだ」「わたくしはエジプトに行きたいんです」とツバメは言いました。「友人たちはナイル川にそって飛びまわったり、大きなはすの花に話しかけたりしています。まもなく、みんなは、王のはかの中でねむります。王もまた、そこのいるどられたひつぎの中にいます。王は黄色のぬので包まれ、こう料を使ってミイラになっています。首には青緑色のひすいの首かざりがかけられ、王の両手はまるでしおれた葉のようなんですよ」「ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん」と王子は言いました。